

事故専務

城山三郎



事故専務

講談社

城山三郎

事 故 専 務

昭和34年5月30日 第1刷発行

城 山 三 郎

東京都文京区音羽町3-19

〒280

発行者

野 間 省 一

印刷所

星野精版印刷株式会社

発行所

東京都文京区
音羽町 3-19

株式
会社

講

談

社

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。（横田製本）

© Saburō Shiroyama, 1959. PRINTED IN JAPAN

目次

生命の歌 ■



7

事故専務 ■



51

生命ライフレス・シテなき街 ■



69

踏台 ■



101

分散屋篤造 ■



141

老人の眼 ■



167

装
幀

中

井

幸

一

事
故
專
務

生
命
の
歌

御令息の法要へのお招き、ありがとうございました。浅川君の思い出を聞くのを、何より供養と心待ちにしているとのこと、お招きを頂かずとも、こちらから出かけて参るのですが、自分は、無事帰郷させて頂きましたものの、帰ってからの生活に馴れず、連日のように下痢やら発熱やらで、とても京都まで出かける体力はございませんので、今度だけは家からお参りさせて頂こうと存じます。

その代り、というのも変ですが、自分が海軍時代とっていた日記帳を手箱にかくし、持ち帰っておりますので、その中、御令息を思い出して頂けそうな部分を抜きとってお送り致します。

御令息が亡くなった時、分隊長や教班長は御両親さまに何と説明致したか存じません。また、たとえ、どのように説明致しようとも、「元氣で出て行ったのに、三月あまりで……」という御両親さまのお嘆きを減らすものとはならなかったでしょう。この日記もおそら

くお嘆きを減らすものとはならないと思います。ただ、終始御令息とともに生活した者として、やはり、この日記はお目にかけての方が良いと思うのです。

今まで気になっていたことですが、御令息の死には、多少なりとも私が関係していました。こうして抜き出してみると、それがいっそうはっきりした感じで、本当に申し訳なく存じて居ります。どうかお裁き下さる気持でお読み下さい。

御令息がよく云っていました仁和寺のうらあたりの静かなお宅には、今日も御令息の霊が帰って、松籟の音に耳をすまして居ることと思います。心から御冥福をお祈りする次第でございます。

昭和二十年十月二十七日

京都市右京区宇多野北野院町一の六

浅川吉太郎

昭和二十年四月六日

七ツボタン、ほんものの七ツボタンの制服を遂に着る。身体中ひきしまり、ふるえるように。ただし寸法を合せただけですぐ脱がされる。正式の入隊式が済んでないのだから仕方がない。

班分けになり、背順をきめる。同じような背だと、下士官は棒を持ってきて、二人の頭を並べ、力一ぱい押さえつける。自分と浅川という練習生もこれをやられた。先に悲鳴をあげた自分の方が背が高いことになる。下士官はみな軍人らしいさっぱりした愉快な方たちだ。

所属は大竹海兵団第二十三分隊第二教班ときまる。助教——海軍二等兵曹・富士松隆雄。教班長——海軍上等兵曹・神本大三から始まって海軍大臣までの官職名を全部覚えねばならぬ。浅川は入隊前に大臣から大竹海兵団長までの名は暗記しておいたという。負けてはならぬ。これからは競争なのだ。

浅川は京都の出。父は府庁の役人、妹が二人あると写真も見せてくれた。彼も整った顔をしているが、女学生服の妹さんはとても美しい。夕顔のような静かな美しさだ。写真を見ている自分の耳もとで浅川は、出発前、家族そろって国幣小社とかの氏神へ参った時、一羽の白鷺がどこからともなく現れ、上空を舞っていたと繰り返し云っていた。武運長久の兆とも考えたいのだろう。自分ちの村では白鷺の一ダースや二ダース珍しくもない。ただ浅川が

あまり熱っぽく話すので、黙って聞いていた。

四月八日

釣床訓練。釣り方、くくり方、すべて厄介な上に、ハンプはボール紙、ロープは針金製の蛇といった感じで腕にさからい、指を傷つける。よく見ると、黄ばんだハンプの上には、古い血痕が二三散っている。くくった釣床はさらに遠い練兵場の端にある半地下式壕へ競争で格納し、また競争で担いで来なくてはならぬ。身長よりも長いハンモックに足を奪われる者、なぎ倒される者、担ぐ中にハンモックがくずれ精神棒に飛ばされる者……。おそい者は何度も往復だ。浅川は最後まで残されていた。無器用なのだ。

真赤になって自分らを追い廻された富士松二曹

「これから朝晩、釣床で鍛えてやる」

と朝晩のところを念を押すように云われる。代って神本上曹

「これは序の口だ。入隊式がすんだら本格的に鍛えてやる。とくにカッターで、きさまらをたたき直してやる」と。精悍そうな小さな顔。汐風と硝煙の匂いがする。

四月十日

入隊式。一昨日の神本班長の言葉を思い出し、感激というより緊張する。七ツボタンの服は、又すぐ脱がされ略衣に。しかし、課業はなく入湯。浅川は思いのほか痩せている。体重は規定ぎりぎりだったという。入湯後、駈歩で洗濯場へ。洗濯まで競争だ。

海兵团本部前の桜の花は満開で、夕闇に白く浮き上って見えた。

四月十二日

漕艇訓練第一日。カッターは思ったより大きい。橈でも自分の腕の二倍の太さがある。橈備へ、橈立テなど一通り習った後、すぐ漕がされる。悪いと櫂の棒。背比べのとき使われたあの棒だ。自分は二発、隣の浅川は五発やられた。頭の頂でカーンと高い音がする。人間の頭は案外かたいものだと思った。

帰投の途中、教班長「俺の教えた班は、漕艇では必ず優勝した。きさまたちも、きつと優勝させてやる。いいな」と。皆「ハイイ」と声を張りあげ応える。顎紐をはずしながら、教班長ははじめて微笑された。目標の宮島遠漕は六月下旬とのこと。また三月近くある。

分隊に帰ってから、手の豆の処理。すった墨を糸にしませ、針で指のつけ根を縫うのだ。指が灼け落ちるかと思われるほど痛い。浅川がためらわず次々に縫って行くのには驚いた。

四月十三日

漕艇訓練二日目。怒声、号笛、怒声、はっとした瞬間、櫂の棒が真向から飛んでくる。高い音を頭で感ずる。眼から火が出るというが、本当に、眼前で金の矢が円形に散る。痛みに手もとがふらつくと、そこへ又櫂の棒が一撃二撃……。汗が眼に流れこみ、黒と赤のフラッシュをたいたように、眼の前が暗転する。棒の飛んでくるのを、はらはら予感しながら、身体を倒し太い櫂を持って、はね返る。怒声、号笛、怒声。櫂の棒。

四月十九日

連日漕艇訓練。

「腹切り」絶対禁物。櫂を滑り落して、その櫂で腹を切る恰好になると、艇の進行がとまる。競漕中「腹切り」したら、本当に腹を切ってお詫びしなくてはならぬ、自分も今日は一度腹を切ってしまい、五発ほど立てつづけに棍棒をくった。

第二教班の「腹切り」常習者、浅川練習生および阪練習生。阪は一番チビだから櫂にふり廻されている。

むしろに眠い。横になった瞬間眠ってしまいそうだが、釣床訓練でいつ「総員起シ」がかかるかも知れない。眠さと戦おうとすると、よけい眠くなる。

浅川が今夜もいびきをかいている。昨日そう云ってやったら「今迄一度だっていびきをかいたことはない」と信用しなかったが。起して聞かせてやる訳にも行かぬ。疲れているのだらう。

四月三十日

漕艇。帰投に当って各班競漕したが、自分の班四着。浅川が腹を切ったためだ。
夜、おそれていたこと起る。

消灯二、三十分後、夢の中で靴音が近づくのを聞いたと思った瞬間、「エイッ」と掛声、
フッ
鉤をロープがすべる音、床を突き破るかと思われる物音が重なった。「軍艦旗降納」だ。浅川がふるい落されていた。釣り方の悪いハンモックを、中に眠っている練習生ごと切り落す罰直である。よく寝こんでいたため、思いきり頭を強打したのか、浅川は起き上れない。神本班長に蹴られ、ゆれるように立ち上ったところを、固い音がして鞏固が右、左。そして「二班総員起シ！」がかかる。

「きさまら、こういう男を出して恥と思わんか。安眠できるのか」

班長の眼は、蛍のように光っている。

暗やみの中で、釣床訓練四回。二班総員の思いが、浅川を責めているのが分る。浅川の釣

り方がまちがっていたとすれば、疲労のせいだ。だが本当にまちがっていたのか。——切り落された後では知りようもない。教班長の執念なのか。ともかく、少しでも気をゆるめてはならないのだ。

五月一日

昨夜半、厠に起きると、まっ暗な衣囊棚の辺から妙な物音がした。暗い管制灯をすかしてみると浅川だ。衣囊棚に箒を突込み、その柄をにぎって、櫓の握り工合を研究しているのだ。自分を見て、指で口を封じる。

釣床に戻ってからも、自分はしばらくその微かな音が気になって眠れなかった。疲れこんでいる筈の浅川。無理するな、睡眠不足の方がこわいぞと、心で叫ぶとともに、教班長の執念に立ち向う浅川の闘志に、拍手したいような気持だ。

今日午後の漕艇訓練では、チビの阪練習生が腹を切った。「浅川を見習え」と、その青くむくんだ顔にどなりつけたい衝動を感じる。チビであれば、人一倍闘志をかきたてるべきだ。

五月六日

昨夜は神本教班長外泊。自分たちは靴をみがき、服にアイロンをかけ、班長係は班長の足